

2024年12月22日 クリスマス(降誕日)礼拝メッセージ

(社会福祉法人日本コイノニア福祉会 法人設立50周年記念礼拝メッセージ)

「小さき中に神宿る」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 2章1-20節

「クリスマス、おめでとうございます」。今日は「クリスマス礼拝」ですから、このような挨拶の言葉があちこちで聞かれますが、どうして「クリスマス、おめでとうございます」と言うのでしょうか。そもそも、「クリスマス」というのは、何をお祝いする時なののでしょうか。例えば、教会に行ったことが無い方でも、「クリスマス」というのは、キリスト教のお祭りで、サンタクロースが子どもたちにプレゼントをくれる日だということは、ご存じなのではないかと思います。ですが、キリスト教に少しでも触れられた方は、クリスマスというの、神の子イエス・キリストの誕生日だということを、どこかで聞いた覚えがあるのではないのでしょうか。イエス・キリストというの、いわゆる「名字と名前」ではなく、「救い主イエス」という意味です。ですから、クリスマスと言うのは、「全ての人を助ける救い主が、今から約2000年前に、赤ちゃんとしてお生まれになった」ことをお祝いする日なわけですが、そう説明されたところで、結局何だかよく分からないという人が多いのではないかと思います。

カトリックの教会や、キリスト教絵画の中で、イエス・キリストが十字架に磔はりつけにされている姿を見たことがある方もおられるかと思いますが。そしてそのような「十字架による罪の贖あがない」という教えに重点を置いている教会では、「神の独り子イエス様は、十字架にかかるために、クリスマスにお生まれになった」と語られることがあります。ですが、新しい命の誕生、赤ちゃんの誕生の場面で、「この赤ちゃんは、みんなの『生にえけ贄』になるために、生まれて来てくれた。ありがとう」というのは、あまりにもおかしな、倒錯した考え方ではないかと思います。むしろ「子どもが病気だったら、替わってあげたい」というのが、素直な親心ではないのでしょうか。ですから、クリスマスにお生まれになったイエス様は、生まれた時から死ぬため、十字架で殺されるために生まれて来たわけではなく、飽くまでもその生涯をかけて神と人々とに誠実に、正直に生きたために、世の権力から疎うとまれ、十字架によって処刑されてしまった。しかし、その命はそこで終わることなく、死から引き起こされて(復活)、その後も尚多くの人たちに、力と励ましを与え続けている……。そのようなイエス様の生き様から、「この人こそ、まさに神の子。目には見えない神の姿を、目に見える人間の姿として現した方。救い主、世の光であった」と呼ばれるようになったというわけなのだろうと思います。

それでは、そのようなイエス様は、どこにどのようにしてお生まれになったか。それが先程、読んで頂きました聖書「ルカによる福音書」2章に書いてありました。イエス様は、神様の子どもとして神殿に生まれたのでもなく、王様の子どもとして宮殿、お城に生まれたのでもありませんでした。マリアとヨセフという貧しい夫婦が、旅の途中で、ベツレヘムという小さな村で出産したとあります。しかも、生まれた赤ちゃん

んは「飼い葉桶」の中に寝かされたとありますから、恐らく人間の住む家ではなく、動物たちが暮らす「家畜小屋」だったのだろうと考えられています。もちろん、かつて日本にも、人間の住む住居と家畜の飼育小屋がくっついていて、人の家の土間の部分に家畜たちが一緒に暮らしているような構造をした家もありましたから、マリアが出産をしたのが厳密に「家畜小屋」だったかどうかは分かりません。ですが、いずれにせよ出産にふさわしい場所、歓迎された場所ではなかったはずでした。何故、そのような場所で、妊婦であったマリアは、初めての出産に臨まねばならなかったのでしょうか。それは 6 節の後半にあります通り、「宿屋（客間）には、彼らの泊まる所がなかったから」でした。これは「どのお部屋もいっぱい、空いていません」という意味ではなく、元のギリシア語では率直に「居場所が無かった」という意味です。災害被災地の病院や野戦病院の様子を想像してみると分かりやすいかと思いますが、たとえベッドが満床であっても、廊下や待合室など、空いているスペースがあれば、患者はどんどん運び込まれて来ます。マリアは出産間際の大きなお腹を抱えていたわけですから、見るからに助けを必要としていた状態でした。にも拘らずに、彼らにはどこにも居場所が与えられなかったのは、マリアとヨセフが差別されていたからでしょう。

さらに、3-4 節にあるように、「住民登録のために自分の町」、いわゆる「本家のある町に戻りなさい」という命令で、彼らはナザレからベツレヘムに戻っていたということですから、そこは全く知らない旅先ではなくて、ヨセフにとってはたとえ遠縁であったとしても親戚や知人たちが何人もいたはずの場所でした。ですから本来であれば、わざわざ宿屋を探す必要すらなかったはずなのに、彼らには居場所がありませんでした。何故でしょうか……。それは恐らく、マリアのお腹の子が、父親不詳の子どもである。「汚れた罪の子である」という偏見から来る差別の故だったと思われる。二人にとっては、故郷であるはずのベツレヘムはとても冷たく、まるで針の筵むしろうのような場所だったでしょう。けれども、そんな粗末な場所であったとして、数は少なかったとはいえ、確かに彼ら二人に出産するスペースと、飼い葉桶のベビーベッドを用意してくれた人たちがいて、初産婦ですから、さぞかし大変だったであろうその出産を手助けしてくれたお産婆さんや女性たちが、数人はいてくれたのだらうと思います。だからこそ、マリアは無事に出産することが出来た。赤ちゃんイエス様も生まれることが出来た……。恐らく、これは想像ですが、そこでマリアとヨセフを助け、その出産を手伝ってくれた人たちもまた、当時の社会の中で片隅に追いやられ、いつも肩身の狭い思いをさせられていた被差別の方々だったのではないかと思います。自分がしんどい思いを知っているからこそ、しんどい人を見たら放っておけない、という共感の心が、自然と目の前にいる隣り人に対して、手を差し伸べさせたのでしょう。

8 節以降、後半のお話に登場する羊飼い達もそうです。野宿をしながら夜通し羊の番をしていた羊飼いというのは、決して穏やかでのどかな職業ではなく、人々か

ら忌み嫌われている被差別の^{せんぎょう}賤業でした。人々が暮らしている村や町から離れた野原とは、いわば荒れ野であり、羊を襲う獣が徘徊している危険な場所でもありましたし、また鬼や悪魔などの悪霊たちがうろついているような場所でもありました。常に世の中心から遠く離れた所に追いやられていて、町の中でも自分たちの存在は見放されて、偏見と差別にさらされていた羊飼達の前に、天使が現れ「(他でもない)あなたがたのために救い主がお生まれになった」(9-10 節)と告げた時、彼らの驚きと喜びは、どれ程のものだったでしょうか。「天使たちが去った後、彼ら(羊飼いたち)は『さあ、ベツレヘムへ行って、主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』と話し合い、急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝ている乳飲み子を探し当てた」(15-17 節)とありますから、彼らのその感激は^{ひとしお}一入だったのだらうと思います。

クリスマスに、人間となって生まれた神の子は、どこに生まれ、誰と共にあったか……。それは世の中心、清らかさや華やかさ、立派さからは遠く離れた所でした。小さくてみすぼらしくて、薄汚くて誰からも見向きもされない所、皆から見放され、仲間外れにされ、つま弾きにされている人々の所でした。「今のお前たちの境遇が恵まれず、呪われ、汚れているのは、お前の先祖たちの^{あくぎょう}悪行や^{たた}崇りのせいだ。気付かずに犯した罪のせいだ。天の神からの裁きを受けているのだ」と、目に見えない神の代弁者となって権威を振りかざす宗教者や為政者の言葉とは、全く正反対の所に、むしろそのような権力者たちから抑圧されている側の人たちの中に、弱く小さくさせられて、息が出来ない状態に追いやられている側の人たちと共に本当の神は生きておられる。そこに目に見える人間の姿となって来て下さった。それが「インマヌエル(私たちと一緒におられる神)」とも呼ばれるイエス様です。だからこそ私たち、全ての人の「^{キリスト}救い主」だと言われるようになったのだと思います。

今日は、久宝教会のクリスマス礼拝であると共に、かつて久宝伝道所から、その活動が始められた日本コイノニア福祉会が、今年 2024 年に社会福祉法人格を取得してから半世紀、50 周年を迎えたことを記念する時でもあります。近鉄・久宝寺口駅の側の自宅で、神学校を卒業したばかりの 20 代の小林達夫先生が、久宝伝道所を開いたのが今から 65 年前の 1959 年です。その後、1964 年に伝道所の方々と無認可のベビーセンターを始め、10 年目を迎えた 1974 年に、社会福祉法人となりました。そして今日までの間に、多くの方々が手を差し伸べて助けて下さり、また常に神様がお導きくださったお陰で、今では複数の事業所を有して、それぞれの地域の方々に保育や介護などの福祉サービスを幅広く提供させて頂くようになりました。

「日本コイノニア福祉会」という名前の由来としては、当時アメリカ合同メソジスト教会より、日本キリスト教団に宣教師として派遣されて来ていたジョージ・トーヤ牧師(1916-2004)との関係があります。トーヤ先生は八尾空港でのお仕事の傍ら、久宝伝道所に協力宣教師として関わって下さり、1974 年の社会福祉法人

設立の際にも発起人の一人として名前を連ねて下さいました。その後、まもなくしてアメリカに帰国されましたが、帰国後は南東部にあるジョージア州のアメリカスにある「コイノニア・ファーム」で暮らされました。そこから「コイノニア」という名前が付けられたそうです。アメリカのコイノニア・ファームは、農業を中心とした共同体ですが、肌の色に基づく偏見と差別が根強く残っている中、それらによらず、共に助け合いながら一緒に暮らしていく共同生活を夫妻は営んでおられたそうです。かつて A さんがクリスマスにコイノニア・ファームを訪れると、そこでみんなが盆踊りをしていたのだそうです。驚いて「何でクリスマスに盆踊りなんですか」と質問した所、トーヤ先生は「盆踊りは、ご先祖様のことを思い出して偲ぶお祭りなのだから、イエス・キリストの誕生を記念し、イエス様の歩みと生涯を覚えるクリスマスに、盆踊りをするのは、ぴったりじゃないか」と言われたそうです。偏見や差別に捕られることなく、肌の色の異なる方々と共に毎週ご夫妻で教会に通っておられたトーヤ先生らしい、自由な発想をよく表しているエピソードだと思いました。

「コイノニア」というギリシャ語は、よく教会では「教会における主にある交わり」などと説明されますが、それは教会という特別な空間における信者さん同士の特別な集まりのことかということ、全然そんなことはありません。もともとは塵ちりや芥あくたを意味する「コイノス」というギリシア語から出来ている言葉です。持ち物らしい持ち物を持っていない貧しい人たちが、その持っている物を互いに貸し借りし合い、共有し合う交わり。お互いに背負っているものを担い合う関係性。良い所だけではなく、悪い所も、負債や「ケガレ」と言われるものをも放っておかないで互いに背負い合うような関係、それが「コイノニア」の本来の意味です。子育てや介護に「困った」「疲れた」と言って来られる地域の方々、それぞれの場所にあって弱くさせられ、小さくさせられている方々に対して、「私たちに出来ることを、一緒に考えさせてください」と言って、手を差し伸べ、共に歩もうとする姿勢。それこそがキリスト教福祉の心であり、またそこにインマヌエルの神、「私たちと共におられる神」が紛れもなく共にいて働いて下さっているのだと思います。

クリスマスに、神が人間になった。それも赤ちゃんとなって、私たちの隣に現れてくれたこと。それは超越的で圧倒的な力をもって、この地上に天変地異を起こして神の存在を誇示するのではなく、むしろ小さきものにこそ神が宿るということ。小さくて壊れてしまいそうな赤ちゃんを抱きかかえる所や、差別されて居場所すら与えられなかった夫婦によりそう所にこそ、そんな小さな小さな私たちの行動の中にこそ、神が共にいて働いて下さっているということを、示しているのだと思います。神は私たち人間の小さな手を介して働かれ、その存在を証します。そのためにイエス様は、クリスマスに来られました。私たちの日々の暮らしも、働きも、決して独りではありません。神と人ともに支えられながら、また一足先に天に召された家族や友人たちにも支えられながら、日々の命が与えられていることを覚え、感謝の内に、またこれからの歩みを進めて参りましょう。